しかして、これは恋愛小説か。

昂綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しかして、これは恋愛小説か。

【Ｎコード】
Ｎ３６５６Ｔ

【作者名】
昂綺羅

【あらすじ】
私は、昔から見ていた。
彼を、彼だけを見ていた。
もちろんこれは比喩だ。でも、どうしようもない位の事実だ。
でも、私はただ見ていただけ。

1話（前書き）

どうにも、恋愛モノが多いですね。
あ、これは昔書いた物をＵＰしてみました。

1話

厄落１

２月１４日

私は、ずっと香取を見てきたと言っても過言ではない。

そう、香取だけを見てきたと言っても過言ではない。

「木本にまた負けた~。あいつ本当に女かよ！？」

例えばこのセリフは小４の頃にも言っていた。ほとんど同じ文面で。

あの時と同じように、周りからは野次が飛ぶ。

そうすると、それにまた香取が答える。

体育終わりの休み時間はこんな感じ。昔と変わらない。

まぁそれはさて置き、次の時間は授業の入れ替えがあって移動教室なのだが、あの様子では気付いてないな。全員。

私は廊下のロッカーに予め用意しておいた教科書類を取り、音楽室に向かう。

女子も数人は気付いて教室に戻ってきているが、中に入れず困っている様子。まぁ、私は用意していたのだから遅刻せずに済むだろう。

とは言っても、着替えに時間が割かれた事は事実であり、あまり悠長に歩いていても間に合わない。

私は少し急いで歩き出す。

いつもは風が入って気持ちのいい３階の音楽室だが、こういう時は３階にあるのが憎たらしい。

２階に作ればよかったのに、と思わずにはいられない。

キーン　コーン

やばい、チャイムが鳴り始めた。と言ってももう２階までは上がってきているのでぎりぎり遅刻はしないだろう。しかし、走らなければ。

扉を開けると、先生はまだ来ていなかった。
私は安堵し机に座る。チャイムがフェードアウトしていくのが分かる。
みんなは、今頃移動教室を思い出してあわてている頃だろうか？
そんな事を考えていると、先生が入って来る。
「高瀬、他の奴らは」
「まだ、教室に居ましたよ」
どうしよう、さっき走ったから喉が渇いている。上手く喋れただろうか？
「そうか、じゃあ少し待っておこう」
そうして2分もしないうちに走って来る足音が聞こえてきた。
「遅いぞ！　お前らもう少し早く来い！」
先生は入ってきた生徒に怒鳴りつけた。
他の先生に比べて、生徒に完ぺきを求める先生だから五月蠅い。
が、自分が関わっていない時は時間がつぶれて嬉しい。
「すいません。　男子が着替えるのが遅くて」
「……そうか、じゃあ女子は座れ」
女子に否はないと判断したのか、それとも否はあっても言い逃れされて時間の無駄だと判断したのか、先生は男子にターゲットを変える。
「じゃあ、何で男子は遅れたんだ！？」
水を得た魚のように怒鳴り出す先生。
「……」
男子は沈黙する。
「事前に連絡は言っていた筈だ！」
「……」
あぁ、これで１０分は授業がつぶれたな。
２月１６日
今日は、土曜の休みの日で町に出てきた。
私は、大の甘いモノ好きで特にケーキには目がない。まぁ、自分

でこういうことを言うのもどうかと思うが。
今日も行きつけのケーキショップ「佐藤屋」で、ケーキを五個も買ってしまった。
時刻は2時を回っている。早く帰ってケーキが食べたい。
と、店を出てすぐにクラスメイトの姿を発見する。あれは同じクラスの伊藤だ。どうにも、すぐにキョドる印象しかない男だ。
あ～、いやそうじゃなく、伊藤は柄の悪い男たちに囲まれていた。
裏道に入るところをみると、ほぼ間違いなく絡まれているのだろう。こういう事は何度目になるのだろう。あいつは街で見かけるたびに絡まれてる気がする。
「助けてやるか」
何度目かになる伊藤の救済をやる事にした。
タイミングを計るために物陰に隠れる。
「おい、にーちゃん俺ら金無いんだわ。恵んでくれないかなぁ」
と一人がいい。
「さっさと出せや！」
と別の奴が言うまで12回「あぁん！？」が入った。
さて、携帯の準備も万全。そろそろ良い頃合いか。
っと、思ったその時男たちの1人がこっちを向いた。
「おい、お前誰だ？」
と、男は問う。が間髪いれずに「あぁん？！」と言い。
「こいつの仲間か？！　あぁん！？」
話す隙も無い。と言うか、「あ」の発音好きですねぇ。
「いえいえ、私はせいぜい警察に通報することしかしてませんよ」
先ほどからずっと110番に繋ぎっ放しの携帯を示す。
「は？！　てめー！」
「おい、相手にすんな。今すぐここからずらかるぞ」
ずらかるって本当に言う人いたんですね。
「ちっ」
そうして、数人の男たちは何処かに去って行った。

ピッ
私は電話を切る。
「私たちもずらかりましょうか」
私は、もう居なくなった男に向かって嫌味を吐いた。
「あ、え？」
また、これだ。本当にキョドリ過ぎだって。
「高瀬。高瀬　作。助けるのはこれが初めてじゃないでしょう？」
なんなら、『つくりさま』と呼んでほしいくらいだ。
「うん、そうだね」
なんとか絞り出すと言う風に答える伊藤。
「ありがとう、つくりさん」
彼はなぜか私を名前で呼ぶ。そこまで仲が良かったとは思わないんだが。しかも顔が赤くなるし。
「伊東くん、絡まれやすいんだから気を付けないとだめだよ？　分かった？」
「……うん」
「どうしてそう、いっつも絡まれるのやら」
「うん、僕にも分からないかな」
まぁ、そうだろう。
「そう、それじゃあ私は家に帰るね」
伊藤その対応に少し残念そうな顔を見せる。
「うん、それじゃまた月曜日」
「そうね」
そう言って、彼は町へと歩き出した。
たぶんまた絡まれるだろうなぁ。
2月19日
この学校には、みんなが避ける生徒がいる。
そいつは典型的な不良にかなり近い。だからこそ、みんなが近寄りたくないと思うのだ。
そいつの名前は『咲山　真』。

現在、私の目の前に立ってる、とても中学生とは思えない身長の男だ。
「おい、高瀬。お前俺の教科書どこにやった」
一応、教科書とか気にするくらいの頭はあったんだ……。少しびっくり。
「んー、知らないかな。何の教科書？」
「歴史だよ！　盗ったんなら知ってるだろうが！」
いや、盗ってねーし。
「お前、この前の体育の後俺のロッカーに近づいただろ！？　見てるやつが大勢いるんだよ！　その時に盗ったんじゃないのかよ！！」
どんな決め付けだよ。そう言えば私のロッカーこいつの右下だったけ。
「誤解ですよ。頭悪すぎですね」
私は、敵意に対しては敵意で返すことにしている。例え相手が咲山でもそれは変わらない。
「何だと！」
と言うよりも、ロッカーから無くなったのかすらも怪しい。一度だけあのロッカーの中を見た事があるが、あれだけ汚いと何がなくなったのかもわからんだろう。
「しかも、すごくロッカー臭いし。あ、口に出ちゃった」
あー、やっちゃった。先生来るまでどうにかやり過ごそう。
「お前！　今何て言った！？」
あー、五月蠅いなぁ。まぁ、怒るのも無理ないか。
ん？　あれ？　なんか
「体もちょっと臭うな。服かな？」
どんどん、顔が赤くなっていく。まぁ、プライドとか傷つくか。
「お前ころ」
「はーい席に着けぇ！」
そこで、チャイムが鳴り先生が入って来る。
「おい、咲山。早く席に着け」

咲山はしぶしぶ席に戻る。……次の休み時間どうしよう。
そうして、委員長が号令をかける。
いつも思うだが、椅子の『がたがた』って言う音をもう少し静かに出来ないのだろうか？
「今日は、進路調査を取り行う。香取、このプリント配ってくれ」
先生は香取にプリントを渡し配らせる。
香取の触ったプリント……早く回って来ないかなぁ。かなちゃん、早くそのプリントをこっちに。
「はい、つくりちゃん」
「ん、ありがとう。かなちゃん」
私はあくまでも平静を装いながらプリントを受け取る。あぁ、香取の匂いがする。
「お前らの進路を決める大事なことだ。しっかり考えて書け」
進路か……。香取はどこの高校に行くのかなぁ。
そうして、暫く自由に考える時間が始まる。
「つくりちゃん凄かったねぇ。咲山相手にあんなこと言っちゃうなんて」
かなちゃんこと吉田かなこが話しかけてくる。
「うん、ただ次の休み時間どうしたものか」
「次は休み時間じゃなくて昼休みよ」
答えたのは正面のかなちゃんではなく、隣の木本えりこだった。
「あ、そう言えば」
これは、４時間目だった。
「もうボケが始まったの？　咲山の誤解は私が解いとくから、屋上ででもお昼はとりなさい。ただし、後であんたも謝っときなさいよ」
「ありがと、今度なんか奢るね」
えりこは咲山と話ができる貴重な奴だった。と言うより面倒見が良かったりするので、えりこを通せば同学年はほぼ全員とコンタクトを取る事が出来る。
「話がついたところで、みんなは進路どうするの？」

かなちゃんが話題を変える。
「かなちゃんはどこに行くの？」
「私はねぇ。N高に行きたいだぁ」
「へぇ、N高って女子高だったよね」
「うん」
「どうして？」
「やっぱり、新体操部あるところでレベルが高い所って言ったらN高だし」
そう言えば、かなちゃんは習い事で新体操をやっていた。中学では新体操部がなかったから、高校ではやりたいのだろう。
「つくりちゃんは？」
香取の行く高校がまだ分からないからなぁ
「まだ未定、えりこは？」
「私はC高にしようと思って」
C高？
「えぇ、C高って……えりちゃんならもっとレベルの高い高校行けるのに」
かなちゃんは、私の疑問を先回りしてぶつける。
「うん、ちょっと……ね」
なにがあったんだろう。
「あ、分かった～」
かなちゃんはニヤついて喋り出す。
「えりちゃん、彼氏でも出来たんでしょう」
はっきり言って、それはないだろう。えりこは男女ともに人気があるが、当の本人はそう言ったいわゆる、色恋沙汰に嫌悪感を抱くと言っていたのだから。
「……うん、実はね」
「「へ？」」
私とかなちゃんはすっとボケた声でハモッた。

1話（後書き）

一応、もう書き終わった物なので定期的にＵＰしてみます。
ただ、どこで切ればいいのか分からない。

2話（前書き）

一応前書きをば
適当に切ってるので読みずらいかも、
と言う前に、既に読みずらく面白くも無いかも

2話

2月23日

「まさか、えりちゃんに恋人とは」

かなこちゃんは横でそんな事を言っている。

実際それには私も驚いた訳だが。

「いつの間に彼氏なんか作ったの？」

まったくそんな素振り見せなかったのに……。

「うん、本当につい最近なんだけどね」

その後、一日遊んだ訳だが、結局誰と付き合っているのかは教えてくれなかった。

まぁ、私は香取以外には興味ないしいいか。

2月25日

今日は、進路希望の用紙の提出期限日。別に適当に書いて出してもいいんだけど……一応今の希望を書いた方がいいんだろうなぁ。私って真面目だなぁ。

さて、そうなると香取の希望先を知る必要がある訳で、そのために用紙を盗み見しないといけない。

1に行動、2に行動、3，4がなくて、5に行動。

よし！　盗み見しよう！

私はそれとなく香取の席に目をやる。香取は席に居た。

「残念」

離れるのを待つか。

いや、しかしプリントを抜く所を見られると痛い。移動教室の時にするべきか。確か、5限目が移動教室だったはず。

「放課後提出だから、結構ぎりぎりかな」

「何が？」

「キャッ！」

後ろを向くとかなちゃんが立っていた。

「な、何でもないよ。それより何か用？」
「あ、うん。えりちゃんの彼氏が気になって調べてみたんだよ、C高に行く人を。そしたらね結構いて、このクラスだけでも１２人いた」
「そんなに？」
「うん、しかも他のクラスも結構いるみたいで、うちの中学からはC高が一番多いんじゃないかな」
「それじゃ、特定は無理ね」
まぁ、仕方ないと言えば仕方ない。そんなに血眼になって探す事もないし。
「やっぱりそうだよねぇ。はぁ、えりちゃんの彼氏誰なのかなぁ」
学校で噂にならないのなら、郊外の男と言うこともありうる。
「でも、付き合いがあるのは香取じゃない？」
まぁ、私の香取に限ってそんな事はないだろうけど。
「あいつ、アンチえりちゃんの代表格だよ？」
「ん～、他は」
「伊藤とかはどうだろう」
「いや、顔はいいけどね」
絡まれやすく、すぐにキョドるあいつとえりこは釣り合わない気がする。
「他は～、咲山とかかなぁ」
確かに、咲山はあんまり周りに馴染んでないし、咲山からえりこにと言うのも無くはなさそうだが
「今一パッとしなよね」
誰も彼もどうもそういう風には見えない。
「てか、今の３人C高に行くの？」
「あ、そうかそれが条件だったね」
おいおい。
「えーと」
えりこちゃんは、ポケットから紙を取り出した。

「伊藤は未定だけど、二人はC高みたいだよ」
へぇ、香取はC高ねぇ。いい事を聞いた。調べる手間が省けてよかった。
「あ、時間だ。ハゲが来るね」
「ん、次数学だったね」
枯木1
12月19日
もうすぐ、クリスマスになる。そんなみんなの心が躍る終業式の日。今はもう放課後だ。
クラスは、やはりクリスマスの話題で盛り上がっている。言うに
「クリスマス、誰んちでパーティする？」
だとか
「彼氏のいない女子！　集合！」
であるとか
「俺たちは友情に生きるぜ！」
とか。
そんな中、香取とえりこもクリスマスの話で盛り上がっている。
「香取？　クリスマス、どこに連れて行ってくれるの？」
「そうだなぁ、えりこはどこに行きたいんだ？」
「じゃあ……香取の家がいいな」
「……」
二人は頬を赤く染めた。
言い御身分だな、私を1人にしたくせに……。
私は、周りにも分かる様、分かりやすく機嫌を悪くする。
そうして、私は廊下へと向かう。帰るのだ。気分が悪い。ただし、2人の世界に浸っている馬鹿どもの邪魔になる様な道筋で。
どんっ
「あら、ごめんなさい。香取さん、木本さん」
「あ、あぁ。こっちこそ悪かった、高瀬」
「えぇ、ごめんなさい。高瀬さん」

このやり取りを見ていたのか、クラス全体が静まり返る。まぁ、3月のあれを知ってるだろうからな。
「それじゃあ、また新学期にね」
私は、また近いうちに遭う事になるけど、と思いながら教室を後にした。
厄落2
3月1日
今日も町にケーキを買いに行こう。
そう思い財布の中を確認すると、そこには偉人のプリントされた紙は一枚も入っていなかった。
「……」
500円玉ならあるが、ケーキが1つしか買えない。自分で言うのもなんだが、私は見栄っ張りなので、ケーキは一回に3つ以上づつ買いたいのだ。店員になめられないように。
かといって、家に引きこもる訳にも行くまい。家には娯楽がないので、1日家に居るのは拷問に近い。715円じゃ何も出来ないけど……。
バスは定期で乗れるとしても、何をして時間をつぶすか。悩みどころだ。
・
・・
・・・
・・・・
そうだ、香取の家に行こう。
将来の事を考えると、家に行った事が無いのもあれだし、先手を取っておこう。
となると、住所を調べなくては。
「連絡網と電話帳」
私は、自分の部屋から電話帳と連絡網を持ってくる。
「〇〇〇ー××××か」

続いて、電話帳を開く。
「R町の……後はこの辺をしらみつぶしに探すしかないか」
香取の家は一軒家と本人が言っていたし、大丈夫だろう。
とりあえず、バスでR町まで行かなくては。
私はバス停に向かう。
いつものバス停までの道のり、毎朝登校時に通るこの１０分余りの道も香取の家に行くと思うと短く感じた。
バス停に着くと、ちょうどバスが来た所の様で扉が開いていた。
これはついてるかも知れない。きっと、神様も私と香取を祝福して下さってるんだわ。
プシュー
扉が閉じる。電光板を見るとR町までバス停４つだった。
後ろの席に座ろうと後ろに向かう。
「さて」
「つくりさん？」
「！？」
私は、声を出すのを必死で我慢した。
横を見るとそこには伊藤がいた。
「おはよう、えと、大丈夫？」
なんか、最近似たような事があった気がする。デジャビュ？！
「ごめんごめん、でもいきなりだとみんなこうなるって」
私が話しかけると、やはりキョドリ始めた。……失礼じゃないか？
「あ、うん、と。とこで、つくりさん。どこに行くの」
噛んじゃったよ。
「R町まで少しね」
まぁ、バスの中での暇潰しくらいにはなるか。
「へ、へぇ。そうなんだ」
伊藤は、バスの中を気にし始めた。ちなみにバスの中には私たち以外誰も乗っていない。
「ところで、伊藤は高校どうするの？」

いきなりの質問に伊藤は体をビクらせた。
なんだろう、顔が赤い。真っ赤だ。
「すー、はー」
なんだか、深呼吸までし始めたし
「つくりさん！」
大声、とまではいかないが、強く名前を呼ばれた。
「何？」
「あなたが好きです！　付き合って下さい！」
・
・・
・・・
・・・・
・・・・・
・・・・・・
はぁ？
「ちょ、何言ってんの？！」
「だから、好きですって言ってます！」
「聞いてない！！」
いや、いきなり、どうしたの？　何が起きたの？　働け！　私の頭！
「い、いきなりそんな言われても」
「返事は、月曜日でいいから。それじゃ」
伊藤はN病院前で降りた。
え？　やっぱり私告白されたの？
どうしよう。今頭がくるくるしてて、香取の家どころじゃない。
とりあえず、次の駅で引き返そうかな。

2話（後書き）

いきなりの急展開！？
って、友達に突っ込まれそうな展開ですな。
確か、全体で原稿用紙６０枚弱あって次から始まる3月3日が異様に長いです。
いやー、なんか『3月3日長っ！！』って友達に突っ込まれそうなくらい長いです。
ま、比較的に……

3話（前書き）

はい、定期的と言いつつ適当な間隔で更新してる小説です。
これ、読んでる人がいたら、ちょー嬉しいですが
どうせ、画面の前で貶されてるのか、
と、思うとちょー泣きてぇ！

3話

3月3日

今日は、女の子の日です。私の頭の中も女の子な事になってます。ていうか、ここ2日ろくに寝付けなかった。しかも土曜からの眠気が今になって襲ってくるし。学校に行きたくないから……なのかな。

学校に行けない。恥ずかしい。恥ずかしすぎる。でも、登校しなくちゃ。でも、恥ずかしい上に眠い。

「午後から行こうっと」

そうと決まれば、寝不足解消のために寝るのみだった。

我が家では珍しく、お昼時に目ざましが鳴り響いた。

「……11時30分…」

午後からの授業に備えて食べないと。

そう思い、ベットから起き上がる。すると、机の上に手紙が置いてあった。おそらく妹の書いた手紙だろう。

『お姉ちゃんが寝ているようなので、今日は一人で行きます。

ご飯はパンを買っておいたので、これを食べてください。

あと、疲れてるんなら無理して学校来なくてもいいと思うよ。

体を大事にするのが一番だからね。

来年は同じクラスになる事を祈るばかりの円より』

私は、手紙に添えられていたパンを開け口に入れる。

「まったく、私の妹にしては出来が良すぎるねぇ」

ま、休んでください。何て言われてもねぇ。

問題の先延ばしはあまり好きじゃない。こういう問題は早め片づけるべきだ。

着替えを始める。

「でも、訳の分からない告白でも嬉しい物だったんだなぁ」

２日悶々としてきたが、改めて考えると割と嬉しいものだと言う事に気付く。
「よし、ＯＫ」
私は着替えを済ませ部屋を出る。たぶん母がなんか言うだろうが、気にしてられない。
私は学校へと足を向けた。
枯木２
１２月２３日
いよいよ明日はクリスマス・イヴ。
２人の予定はしっかりと調べた。普通のデート変わらない。遊んだり食べたりして、香取の家で夜を明かして、朝を迎える。そんな所だった。
きっと、２人は幸せなクリスマスのつもりなんだろう。好きな人と遊んで、好きな人と食事をして、好きな人と夜をともにするして、好きな人と朝を迎える。とても幸せで特別な日にするつもりに違いない。
でも、私はそんなの許さない。幸せを永遠に失ってしまった私は、それを奪った香取とえりこを絶対に許さない。
「今年のクリスマスプレゼント、期待してていいからね。ふふふ」
厄落３
３月３日
学校に着いたのは昼休みが終りを告げる7分前だった。そうして、来たばかりで円に遭遇した。
「おねえちゃん学校来たの！？　休んでれば良かったのに！　体は大丈夫？！　最近寝てなかったみたいだから、私心配だよう」
いきなり挨拶なしで円は喋り始めた。
「大丈夫。相変わらず、過保護な妹だ」
過保護を通り過ぎてるとは言わない。
「今日は用事があったから来ない訳にはいかないよ」
「用事？　何の？」

「秘密。それより、もうすぐ授業でしょ、教室に戻りな」
予鈴のチャイムが鳴り響く。が、円はお構いなしだ。
「分かった、男がらみだね。それも告白だ」
「馬鹿言ってないで」
言いつつ私は内心動揺しまくりだった。あぁ、声とか裏返って無かったよね？
「へへへ」
妹は笑う。この笑い方は疑ってるな。
「お姉ちゃんには彼氏なんていらないよ、私がいるんだから。彼氏なんて作らずずっと一緒にいよ！　お姉ちゃん」
そう言って円は走り去って行った。
……どうにも、あの子の私に対する物言いは心配になる物が多い。シスコン？　あの子にこそ彼氏とかが必要じゃないかしら。

教室に行くとかなちゃんに言葉攻めにあった。
「サボっちゃだめだよ！」
とか
「どうして遅れたの？」
とか
「次からは気をつけるように！」
とか
「所で私、告白されたんのだよね」
とか。
……ん？
「まった、今何て？」
「うん、私告白されちゃった」
「誰に？」
そこでチャイムが鳴った。
「えへへ、それじゃまた後で」
そう言って前を向くかなちゃん。

５限目が始まる。
歴史の授業なのだが、私は未だに『さかもとりょうま』が漢字で書けない。
そんな私はダメな子なのだろうか？
いや、こんな精神状態で授業になる訳がないからだ。
だって、教室が静かになったら告白の事思い出してしまって。
あぁ、時間的には放課後に行かなくては。
……どこに行くんだっけ？
あぁ、そう言えば集合場所を決めてなかったな。
グダグダな告白、っとそう思いながらも伊東らしいな、と少しニヤけてしまう。どうにも告白されただけでずいぶんほだされてしまったようだ。

６限目はＨＲ。
今思うと、５限目は伊藤の事ばっかりだったな。
ちなみに、ＨＲでは卒業式に使う造花を作る作業だった。私は早々に作り終わり、今はこうしてかなちゃんとえりことお喋りタイムだ。
「……だったんだよ」
かなちゃんは話を終える。
「ふーん、そうなんだ」
えりこはそれに相槌を打つ。
そろそろ、さっきの話題を振ろう。
「ところでさぁ、さっきかなちゃんが告白されたって言うの本当なの？」
「あ、そう言えばその話の途中だったね」
かなちゃんは思い出したように言う。
「相手はね、つくりちゃんも知ってる人」
かなちゃんは恥ずかしそうに頬を染めた。
「びっくりしたよ、そんな気配も無くいきなりの告白だったから」

やはり、みんなそんな感じなのだろうか？
「誰なの」
私は問いかける。
「あのね、咲山君」
「へ？」
「だから、咲山君なの。告白してきたのは」
……驚いた。たぶん自分のこの前の告白の時と同じくらい。
「それで？　ＯＫしたの？」
「もちろん、断ったよ。だって咲山君だし、暴力的な人だし。でも、そんな人からの告白でも、意外と嬉しいものだね」
告白されて嬉しいのはみんな一緒か……。
「昼休みに告白されたんだけど、咲山君１年前から好きだったんだって」
「へぇ、付き合っちゃえば良かったのに」
私は軽口を言う。
「無理だよ。だって向き合ってるだけでものすごく怖かったんだよ。断る時も、『仕返しに何かされたらどうしよう』ってそればっかり気になって」
「咲山はそんなにヒドイ奴じゃないわよ」
横からえりこが会話に入って来る。
「うん、ものすごく清々しい終わり方だった」
なるほど、人は判断が難しい。振られたら殴ってでも付き合わせるタイプかと思っていたが、
「以外に好青年だった言う訳か」
「うん」
「で、つくりの方はどうなの？」
かなこが質問してくる。
「何が？」
「告白、あんたもされてるんでしょ？」
驚いた。もう伝わってるのか。

「かなこの話題で隠れちゃったけど、朝はそこそこ噂になってたわよ。かなでが伊藤に告白されたって。それ、本当なの？」
まったく、どこから漏れたのやら。
「……みんなにはまだ内緒にしててね」
こんな約束、無意味だろうけど。
「実は、この後告白の返事をしに行くんだ。だから今日は2人で帰って」
「いいよ。それで、あんたはどう答えるの？」
えりこはそんな事を訊いてくる。その横でかなちゃんが驚きのあまり口をパクパクさせているが。
「それは、明日ね。楽しみに待ってると良いよ」
もう心は決まっているが、だからと言って答えを求める本人よりも先に誰かに聞かせる訳にもいかない。
「OKである事を祈るのみだね。個人的には伊藤は嫌いじゃないしね」
「……伊藤君…つくりちゃんに告白したの本当だったんだ……」
かなちゃんは目に見えて落ち込んでいた。
「かなちゃん、大丈夫？」
「あ、え？　うん。大丈夫だよ」
「それじゃあ、花を回収する。香取、これに集めてくれ」
「はい」
雑談は先生に遮られる形で終わった。
いや、それよりも今は香取だ。
香取が箱を持ってこっちに歩いてくる。どうしよう、顔は赤くなってないよね？　香取は。あれ？　香取の頬が染まってる？　照れてる？　私が一番後ろだから他にいないし。私に照れてる？
間違いなくそうだよね。
「高瀬、早くしろよ」
キャッ！　香取に名前呼ばれちゃった。
「うん、これ、はい！」

私は、はきはきと返事をして花を渡した。その時に手が触れてしまった。もう手が洗えないよー。

そうすると、えりこの方を向いてしまった。照れ屋さんめ。

あれ？　でも今見つめあってた気がするけど。気のせいだよね？

3話（後書き）

一応補足説明

この小説は、2~3月を舞台にした厄落と、12月のクリスマスを舞台にした枯木、そして幕間で構成された小説です？

え？　知ってた？

じゃ、いいや

4話（前書き）

もうそろそろ終わりかな？

4話

幕間　妹
3月3日
　お姉ちゃんは隠し事をしていた。
　私の今日の午後はこの事を考えることで終わった気がする。
　おそらく、告白されたのは図星だと思う。あれだけ可愛いお姉ちゃんに悪い虫がつかない方がおかしいのだ。でも、私はそんなの許さない。そんな奴がいたら殺してやる。
　そう言えば、噂でもお姉ちゃんに告白したとかしてないとか言ってたっけ？
「おね……2年3組で告白したのって誰だか知ってる？」
　私はクラスメイトにそれとなく訊いてみた。
「ん？　それってあれだろ？　咲山　真の事だろ？　驚いたよなぁ、まさかあいつが女の子に告白するとは」
「咲山って奴ね。ありがとう」
　もう放課後だ。お姉ちゃんが帰ってしまう前に訊いてみなくては。
厄落4
3月3日
放課後、伊藤と一緒に屋上に来ていた。
　この時期の屋上は寒くて誰も来ないし、放課後ならなおさらだ。こういう話をするのにはうってつけの場所だろう。
　ただ、そのうってつけの場所で私たちは2人とも話しだせずにいる。気まずい。
「……あの」
　ついに伊藤から話しだす。
「この前はいきなりごめん。でも、俺が君を好きなのは本当なんだ」
「……」
「明確に好きだと感じたのはいつか覚えてない。ただ、最初から…

…最初に町で助けてくれた時から僕は君に惚れてたと思う」
そんな事を堂々と言う伊藤。まぁ、言いたい事はあるがとりあえず聞こう。
「そんな時あのバスで、陳腐な言い方をするなら運命を感じたのかな？　とにかく都合が良かった。僕を知ってる人間が誰もいなくて、この機を逃したらもう駄目だ、そう自分に言い聞かせて告白したんだ」
「……そう」
私の頬はさぞおいしそうに染まってる事だろう。そう言えば、さすがに覚悟を決めたのかキョドってないな。
「あの告白ね。最初は驚いたけど、とっても嬉しかった」
「それじゃ！」
伊藤の顔が希望にあふれたものになる。
「でも、ごめんなさい」
「え？！」
そしてすぐに、暗くなる。
「私には好きな人がいるの。その人とはほとんど話した事がないけど、小学生のころからずっと追いかけてきたの。あんまり話した事はないんだけどね」
私はほほ笑む。
「でも、やっぱり彼好きだから、あなたを好きにはなれない」
「……」
彼は、泣きそうなその顔で黙りこむ。
「だから、ごめんなさい。それと、ありがと」
私は彼に背を向ける。これ以上彼に伝える言葉はない。彼もこれ以上私に伝える言葉はないだろう。
ただ、彼には心の底から感謝したい。
思いは伝えなくてはいけないものだ。ただ、追いかけて思っているだけではいけない。私も彼みたいに告白してみようと思う。
そんな気にさせてくれた彼には本当に心の底から感謝したい。

そう考えながら私は屋上を後にする。

幕間　妹

3月3日

お姉ちゃんはいったい何処に居るのかしら？　こんなに妹が探しているのに痕跡一つ見つからないなんて。

「二年の高瀬　作を知らない？」

私はそこにいた1年生に訊いてみる。もちろん知ってるとは思ってない。

「ちょっと知らないです」

「そう、ありがとね」

私は、礼を言って場を去る。

クラスメイトに聞いた話だと伊藤という男子と一緒に屋上に行ったらしいから、そいつが告白したのか。くそっ！　あのハゲ教師の所為で出遅れた。たかが数学の一つや二つでがたがた言いやがって。

「あぁ、とりあえず屋上から靴箱までには居なかったか……」

どうにも、追いつけなかったらしい。伊藤は今度、死刑だ。

「もう、家で訊こう」

私は、諦めて靴を履く事にした。……なんだか、靴が小さい。今度買いなおさなければ。

私は小さくなった靴を履き、校門に向かう。

すると、そこにはお姉ちゃんがいた。いや、正確にはお姉ちゃん他一名。

あまり覚えてないが1年の時一緒だった、咲山……だったかな。そう言えば、咲山が告白したと言う噂があったな。つまり2人で下校？　証拠を掴んでやる。私は少し離れた場所に隠れる。

「よう、待ってぜ」

やっぱり待ってたんだ。

「誰をよ、まさか私なんて言わないよね？」

「お前以外にはまたねぇよ」

く、もう僅か数時間でラブラブか。
「これから、ちょっと付き合って欲しくてさ」
……私は、隠れるようにしてその場を離れる。もう聞いてられない。裏門から出て帰ろう。
あと、家で包丁のある場所を確認しておかないと。別に何かに使う訳じゃないけど。
幕間　かなこ
12月23日
私には一つの確信があった。今年のクリスマスに関する事で。
それは、クリスマスを楽しめない。そういう確信だ。
今年のクリスマスは1人ではないし、伊東くんに不満がある訳でもない。
ただ、明日は彼女の誕生日なのだ。
去年は、クリスマスと誕生日の同じということで騒いだものだが……。今はその事実が笑ってしまえるような心境ではない。むしろ、知っている……この事が、辛い。
どうしても、彼女を思い出してしまうから。
そんな中途半端な気持ちで過ごしてきたこの一年……何をしても、心からは楽しめなかった。
だから、このクリスマスもきっと同じ。
枯木3
12月24日
今日は、復讐の日だ。
私から幸せを奪って行った男への復讐の日。
この日の為に、生きてきた。
いや、この日を越えて死ぬために生きてきた。
幸せの無くなった世界に未練などない。
ただ、あいつらだけが幸せを掴んで生きて行くなんて許せない。
ならば、この私にとっても俗世にとっても大切なこの日に、全てが壊れてしまえばいい。

厄落５
３月４日
　１１時３０分、いつもなら学校で聞くに堪えない教師の声を聞いてる時間だ。しかし、私は学校にいない。もっと言うなら警察に呼び出されていた。
「じゃあ、君はそのカフェで咲山君と別れたんだね？」
「はい」
「何の話をしたのかな？」
「別に、珍しくも無い恋愛相談を受けてていただけですよ」
　告白されたあの日、私は咲山に恋愛相談を受けていた。どうにもかなちゃんの事が諦められなかった様で、その事に関する相談だ。
「へぇ、先日口喧嘩した後だって言うのに？」
「えぇ」
　どうにも、この警察の喋り方は癇に障る。
「嘘つくなよ。そんな仲の悪い奴に恋愛相談なんかする訳ないだろう？」
「知りませんよ。」
　実際には、えりこが私に厄介事を回してきたのだが。それにうまく乗せられる咲山ってやっぱり馬鹿なのかなぁ。
「どこに居るんだろうねぇ、咲山君」
　こいつは、黙っていていればいいのに。
「さぁ、素行はかなり悪かったですからねぇ。家出とかじゃないですか？」
「おじさん、そうは思えないんだよねぇ」
　あくまで、笑顔で聞いてくる警察。
「もういいですか？　来年受験を控えた中学生なんですよ？　落ちたらどうするんですか」
　私は少し強めの口調で言った。いい加減疲れてきたのだ。
「クラスメイトが居なくなってるのに、受験の心配ね……」
「え？」

警察は急に声のトーンを落とす。
「いや、そうだね。今日は帰ってもらって構わない。ただ、これはまだ世間に出まわってない情報なんだが」
じゃあ、言わなくていいだろ。とは言わない。これこそ、言わなくていい事だ。
「咲山君の鞄やらなんやら見つかってはいるんだよね。ただ、それらに致死量と推測できる血液がついてたんだよ。……咲山君死んでるかもね」
「……」
私はその後、若い警察に送られて学校に行った。
3月5日
今日も警察に呼び出されている。午後4時くらいからだったかな？
いい加減にしてほしい、たかが咲山1人死んだくらいでしつこすぎる。
そもそも、学校ではみんなに嫌われて、不良生徒のレッテルをはられた奴なんてほっとけばいいのだ。
はぁ、早くこの香取への手紙を書きあげてしまいたいのに。
香取の事なんて、A4が5枚じゃ全然足りないのだが、まぁ上手くまとめるしかないか。
3月6日
警察の所為で手紙は徹夜になった。まったく、寝不足だ。
しかし、手紙自体は書きあがったので良しとする。
ちなみにラブレター渡すのってかなり勇気がいる事を今日知った。
まぁ、恥ずかしかったから、わざわざ香取の家に行って机の上に置いて来たんだけどね。
その所為で学校には大遅刻。でも、気にしないもん。
3月7日
今日はとてもみんなからの視線を集めた。なぜだろう？　しかもみんな引いてるような視線だし。2日続けての大遅刻だから？
入ると香取と視線があった。すぐに目を背けちゃって、かわいい

なぁ。

あれ？　でも、今の視線はドン引きした視線だったような……。

いや、ラブレターも送って、私が香取の事好きだって伝えんたんだからそんなこと無いはず。

明日は香取を呼び出して返事を聞くのだ。絶対ＯＫの筈だ。だから大丈夫！

5話（前書き）

全ての現象には理由がある
ガリレオってこんなセリフがあった気がする

5話

幕間　かなこ
１２月２３日
　気乗りがしないとはいえ、伊藤と過ごす初めてのクリスマス、それなりの準備は必要だ。
　そう考えた私は、服やその他を見に町に来ていた。
「よう！　吉田。今日は明日に向けて買い物か？」
　目の前には香取の姿があった。
「えぇ、香取君は何の用で？」
「あぁー、お前とほぼ同じだよ。俺も明日に備えて、な」
「そう」
　やる事はみんな同じか。
「ねぇ、そこでちょっとお茶でも飲みながらお話しない？」
「お、いいね。でもなぁ、えりこは浮気だとか言わないかなぁ」
「大丈夫よ、話題には気を付けるわ」
「例えば？」
「そうね、私が忌引きしていた３月の事についてとか……」
「……」
　香取はバツの悪そうな顔をして黙りこんでしまった。
「そう言えば……」
「はぐらかさないで！」
　香取は少し驚いたようで硬直していた。
「教えてほしいの。つくりちゃんの親友として、えりちゃんの親友として、あの３月の事件の詳細を！」
「それなら、えりこに聞けば」
「聞いたわ！　でも教えてくれないかった」
　かなり声が大きかったと思う、周りの人は数人こちらを見ていた。
「もう、香取君しかいないの！　あの日、何があったの？」

私は苛立ちにも似た何かを覚えていた。親友の関わった事件について何も知らない自分に対して。
「はぁ、そんな顔されちゃ仕方ないか。本当は思い出したくも無いんだけど」
「？」
「ここ」
香取に示されるまま頬を触ると、頬は湿り気を帯びていた。
「とりあえず、向こうに行こう。みんな見てる」
そう言われて私は近くのカフェに入った。

「とりあえず、あの事件の前の事について話さないといけないな」
「事件の前？」
「そう、始まり……俺にとって初めて受けたアプローチは2日前の3月6日だった。
その日家に帰ると机の上に手紙が置いてあった。差出人は高瀬作。
奇妙だろ？　俺はあいつを家に上げた事どころか、教えたことさえない。なのにあいつが家に来た痕跡があった。
しかも、おふくろに聞いたら高瀬は家に着てなかったそうだ」
「それは」
確かにおかしい。
「で、また内容が問題でな」
軽快に語る香取の唇は僅かに震えていた。
「俺についての報告書、とでも言うのが近いだろうな。俺の小学校から去年までの動向が書き綴ってあった。
例えば、体育祭の徒競走で何位だったとか、俺が出た劇で何回噛んだとか、俺が忘れてる事も含めてＡ４の紙１２枚分だな。
で、最後の１枚には一言
『好きです』
とだけ書かれていた」

「つまり、ストーカーだった？」
香取はただ頷いた。
「そして次の日、今度は一枚だけの手紙が置いてあった。内容は『明日の午後１時、学校の屋上に来てほしい』それだけだった」
ここで、香取は頼んでいたコーヒーに口を付ける。
「で、問題の日だ。俺はその日えりこを連れて行った。もう付きまとわない様に忠告するために」
厄落６
３月８日
香取を呼び出した土曜日。香取は来てくれた。でも、
「何でえりこまで居るのよ！」
えりこが香取の隣にいた。
「俺が連れて来たんだ」
「私は香取君に用があったの！」
「あぁ、だからえりこを連れてきたんだ。
高瀬良く聞け、俺はｅｒ」
「私は香取が好きなの！　小学生の時からずっと！　ずっと！　お願い！　私を見て！　私とずっと一緒に居て！」
私は香取の声にかぶせるように叫んだ。その先の事実を聞きたくなかったから。
「何が好きよ！？　ストーカーみたいな事しておきながら！　香取はね！　あたしと付き合ってるの！」
えりこが、叫んでいた。聞いた事がないような、怒りのこもった声で。
「こう言うことだ。分かってくれ高瀬。今回の事も大事にはしないから、俺の事は諦めてくれ」
音はもうほとんど耳に届かなかった。
「お……い…きい…か……おい…」
香取は何を言っているのだろう？
「あああああああああああああああ」

ひと際大きい声が、自分のものだと気付くのに数秒かかった。
「止めろ！　えりこに手を出すな！」
気付くと私はフェンスに叩きつけられていた。あれ？
「それだけは、俺が許さない！」
あぁ、香取に投げられたのか……。
「もういいよ、香取。咲山を殺した女に言葉なんか分かんないよ」
「……何を…言ってるの？」
咲山を殺した？　私が？
「あんたが咲山を殺したんだろ？　みんな知ってんだよ。お前が咲山を殺して埋めたってことは」
「わ…たし。そんな事、してない」
「ふん、どうか！」
「おいえりこ、やめろ。とにかく高瀬、俺にはもう近ずくな。えりこにもだ。もし、えりこに何かあったらお前を殺す。咲山だとか関係なくな」
そう言い残して二人は去って行った。
「な…ん……で」
何でだろう。どうして伝わらないのだろう。
「う、うぇ……うぇ…う、う、う、う、」
私は、こんなに香取が好きなのに。
「お姉ちゃん、大丈夫？」
顔をあげるとそこには妹の円がいた。
「円？」
「そうだよ」
「どうしてここに？」
「えへ。手紙ね、実は私読んじゃったの、お姉ちゃんが出す前に。で、さっきまで隠れたんだ」
私は、涙をぬぐう。
「でも、てっきり咲山って人と付き合ってると思ってたから驚いたなぁ。違ったの？」

「咲山？」
「うん。この前、校門で付き合って欲しいとかのたうち回ってたクズ」
「……あれは、咲山がかなちゃんに告白したいからって……相談に乗って」
「へぇ、それじゃ悪いことしたなぁ」
「悪い事？　……円、あんた帰りが遅かった日があったよね？　ちょうどその相談に乗った日」
私は…私の頭の中にはある予感だけが渦巻いている。
「うん？　あー、たぶん考えてる通りだと思うよ？　お姉ちゃんについた悪い虫は駆除してしまおうって思って」
「……」
「咲山さんにはね、死んでもらったの」
どうしてだろう？　妹が、可愛い妹がこんなに憎く思えるのは。
「あんたさえいなければ」
「え？　何？　お姉ちゃん」
あんたさえいなければ、きっとうまく行ったのに。香取に嫌われずに済んだのに。失敗したのはお前の所為だ。
「え？　お姉ちゃん？！」
私の手は円の首に回っていた。

5話（後書き）

多少無理があるかな？
でも、今さらな感じですね。
更に補足説明
幕間に関しても、妹　かなこ　の２つあります
え？　知ってた？
……そうか
じゃあ、妹が3月でかなこが１2月なのは？
知ってた？
あ、そう

6話（前書き）

遂に完結、感動のラスト！

と言う訳にはいかない。もう少しうまく書けてればそうなったかもしれないが……

まぁ、今さら書きなおすつもりは皆無だよーん

6話

枯木４
１２月２４日
私は押し入れで息をひそめていた。
おそらくは、２人で行為に及ぶであろう部屋の押し入れに。
「お邪魔しまーす」
えりこの声が響く。
「まぁ、上がって。散らかってるのはかんべんな」
「うーん、思って頼りは散らかってないよ」
声の響き具合からすると隣の部屋に行ったらしい。
「あれ？　お母さんは？」
「あぁ、今日はおふくろはいないよ」
「じゃあ……２人きり、ね」
「……」
「もう、どうしたの？」
「……昨日、吉田に会った」
「彼女の前で他の女の話？　浮気の告白？」
「３月の事聞かれた」
「え？！」
「……俺たちこんな事しててていいのかな？　やっぱり俺」
「いいじゃない。見せつけてやればいいのよ。私たちはこんなに仲がいいって。寝室ってあっちでしょ？　先に行ってるから早く来てね」
「……」
良く分からないが、足音は二つに分かれ一つはこっちに来る。
「……つくり、ごめんね」
「もう、おそいよ」
「え？」

私は後ろから近づき喉に包丁を刺した。
「・・・・・・・・・・」
必死に口を動かすが声がでない様だった。
「ようやく、半分」
私は、死体―これ、まだ意識はあるのかな？―を押し入れに入れるために持ち上げようとする。
がたんっ
扉の方から音が響く。
「な、何だこ」
言いかけた所で香取は嘔吐し始めた。
「汚いなぁ。女の子の前だよ？　もうちょっとさぁ」
まぁ、今さらかな。
「これはお前が？」
息を切らしながら香取は訊いてくる。
「うん、そうだね」
香取は立ち上がろうともせずに聞いてくる。
「お2人には、『お姉ちゃん』の誕生日である今日、この日に死んでもらおうと思いまして」
厄落7
3月8日
「お、姉ちゃん。苦しい」
円は必死に訴えてくる。
「おねえちゃん、わたひのころ、きらひになったの？」
その言葉に私の手の力は緩んだ。
「けほ、けほ」
「……ねぇ、円。私の事、好き？」
「けほ、も、もちろんだよ」
「そう」
私は、最悪だ。
こんなに一途な妹を殺そうとしたなんて。

「ねぇ、円」
「何？」
「こんな私の事が好きなら、１つだけお願いを聞いてくれない？」
「うん！」
私に頼られる事が嬉しいのか、跳ね上がるように喜ぶ円。
「少しの間、あっちを向いてて。いいて言うまでこっちを向いちゃだめ」
「わかった」
私は音をたてないようにフェンスに近ずく。
「今まで、楽しかったね。遊園地にはじめて行った時の事覚えてる？」
私はフェンスを上っている事が分からない様に円に話しかける。
「うん、お姉ちゃんジェットコースターで本気で泣いてたね」
「あはは、そんな事もあったね」
がしゃがしゃ
私は極力音をたてないように登る。
「アイスこぼした時もお姉ちゃんが自分のをくれた」
「私はお姉ちゃんだもん」
がしゃがしゃ
今度は降りる。
「あのアイスは、人生で一番おいしいアイスだったよ」
ついに縁に立った。
「お姉ちゃん？」
「ねぇ円」
最後に神に願えるのなら
「さよなら」
この子の犯した罪が永遠ばれませんように。
枯木５
１２月２４日
「お姉ちゃんが死んだのは、あなた達の所為だもの。その贖罪をし

てもらうには、お姉ちゃんの誕生日って言うのはもってこいだよね」
　そのために、待ったのだ。何カ月もこの日のために。
「知らない、高瀬が死んだのはあいつが弱かったからだ。そうだ、あいつは異常者だった」
「お姉ちゃんは、異常じゃない！」
　五月蠅い。
「ああああああああああああああ」
　私は手の甲に包丁を突き刺す。
ジャコン！
　続いて伸縮警棒を取りだした。
「異常なのはお姉ちゃんを振ったお前だ！」
　頭を殴りつける。
「ぐああああああああああああ」
　血が流れ始めた。
「だって、お姉ちゃんは悪くないんだから」
　左手に取り出したナイフで太ももを突き刺す。
「悪いのは、おまえ等だ！」
　顎を蹴りあげた。
「よってたかって、お姉ちゃんを苛めた」
　腹を警棒で殴りつける。
「お前さえ、告白にＯＫしていれば」
　拾い上げた包丁を腹に突き刺す。
「そうすればお姉ちゃんは死なずに済んだのに」
　頭を警棒で殴る。
　殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。る。殴

る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴
る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴

る。殴る。

気がつくと、それはもう人間に見えなかった。

「あはははははは」

私は、ついにやったのだ。

「お姉ちゃん、終わったよ。お姉ちゃんを苦しめた奴は、私が退治したから。安心してね」

私は人間だったそれらに目を落とす。

「これで……終りだよね。お姉ちゃん」

エピローグ　かなこ

2月27日

血のクリスマス。

イヴ殺人事件。

異常殺人犯によるカップル惨殺事件。

さまざまに呼ばれたその事件は、意外な形で結末を迎えた。

2月26日、犯人『高瀬　円』の死体が発見された。

発見場所は、彼女の姉の墓場。１２月２４日にカップルの死体が供えられていた場所で。
死因は、喉に刺さった一本のナイフだそうだ。
……あのクリスマス・イヴ。私が伊藤と惚気ていた時に何が起きたか、想像する事は容易いし、それはおおよそ合っているだろう。
何が行われていたか、そんな物は高瀬　円による高瀬　作のための殺人。
それ以外にはない。
あの子がやった以上それは高瀬　作のための殺人である事は間違いない。もっとも、それを高瀬　作が望んだのか、それは誰にも分からない。
ただ、墓石に寄り添うように死んでいた円の顔は満足そうに笑っていたそうだ。

6話（後書き）

と言う訳で、今年の春先に3日くらいで書いた作品は完結です。
ちなみに、予約投稿昨日でやってました。
いやー、後味の悪い終わり方をしたかっただけの作品と言う風に見てもらえればそれでいいやｗｗｗ
ところで、これ、面白かった？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3656t/

しかして、これは恋愛小説か。

2011年5月26日14時10分発行